アグンデ思ケル、○下略

〔園太暦〕觀應元年十二月七日、凶徒已入八幡○中略燒在家、大渡橋引之退散、二年正月十一日、將軍○足利尊氏昨日到著山崎、可攻八幡之旨評議、大渡橋無之、或以船可渡旨、或又可懸橋、其事未決云、

〔花營三代記上〕應安四年十二月二日、未時春日御神木入洛、奉入長講堂自寺大路宇治入洛之由、依有其聞、差遣警固人等、自西路橋大渡入洛云々、

〔遊囊賸記九〕山崎橋ハ神龜ニ廢ヲ興シ、嘉祥ニ舊ク易ヘタリシガ、元來衆水ノ會、泛濫ノ衝、兩岸侵嚙ノ患多ク、流亡世々ニ止事ナシ、天正ニ再建ノ功ヲ遂ラレシモ、亦幾程ナク斷絶シテ、今ハ橋本ノ名ヲノミ殘ス、

〔都紀行一〕十日○文久四年三月中略、むかし山崎へ渡る大橋ありしが、今は舟渡しとなり、名のみ殘れる橋本の町に出て、狐川の渡しを越て、山崎離宮八幡宮に詣ふずるに、○略下

〔山城名勝志六乙訓郡〕河陽中略橋、或云、山崎同所歟、

〔雍州府志五寺院〕紀伊郡　金光明四天王敎王護國寺○略中　古○略中有迎蕃客於河陽之事、河陽今山崎乎、

〔朝野群載三文筆〕遊女記

自山城國與渡津、浮巨川西行一日、謂之河陽、往返於山陽、南海、西海三道之者、莫不遵此路、江以言

〔本朝文粹九序〕見遊女

二年三月、豫州源太守兼員外左典厩、春行南海、路次河陽、河陽則介山河攝三州之間、而天下之要津也、自西自東、自南自北、往反之者、莫不率由此路矣、○略下

〔續日本後紀十八仁明〕承和十五年○嘉祥元年八月辛卯、洪水浩々、人畜流損、河陽橋斷絶、僅殘六間、

〔文華秀麗集下〕河陽橋